月は運命の歯車

黎奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月は運命の歯車

【Ｎコード】
Ｎ３１９９Ｏ

【作者名】
黎奈

【あらすじ】
主人公　かぐや　優姫　は十五歳をむかえる十五夜の日に奇妙な魔方陣を見た。「なんだろう？」そう思って興味本位に近づいてみた。
すると、ズウ”ォン””・・・ぐいっ！！魔方陣から手が伸びてきて腕をつかんできた！！「うわわぁぁ！！！」いきなりのことで体のバランスを崩しそのまま魔法人の中に引きずり込まれた。
ヒュー、ズドン
そうしてやってきたのは魔法がうようよある世界だった。

そんな世界で自分の運命に惑わされてあたふたする少女の物語です。

第一話　序章〜自己紹介

私は今通学路にいます！！今日は楽しい楽しいお月見だー＾＾

通学路はまだ夕日に照らされ月はまだ昇ってこない。

はやくみえないかなぁー〜〜？

今日の私は上機嫌。

なんたって年に一度しかみれないきれいなきれいな十五夜の満月だもの＾＾

あ、自己紹介が遅れましたっ。

私、かぐや　優姫（ゆうき）　っていうの。

みんなにはなぜだか“かぐや姫”って呼ばれるの。

なんでだろうね、自分じゃわかんないや。

まぁ、それはおいといて。

私は今日で十五歳を迎えました！！

すごいでしょ？十五夜が訪れるこの日に私は十五歳になるんだからぁ〜〜。

まだなってないよ？私は夜に生まれたから夜にならないとね。

でもね？

このときはまだ私は知らなかったんだよ？

この世界から離れることになるなんて・・。

ほんとにほんとに今はこんなこと知らなかったんだから。

だからね、心の奥底で今日は運命の歯車が動き出すことを悟っても

私は知らない振りをしてたんだよ。

だって、私の予言は言葉に出してはいけないもの。

絶対　的中　するから。

だからね、このことを知ってる人たちは今はまだ誰もいないんだよ。

だから私もそ知らぬふりをして今日まで生きてきたんだ。

運命に従って。

でもね、これが運命なんだってはじめは理解できなかったことは理解してよ？

だからね、私の物語は今から始まるんだ。

今からだよ？

さっきのは、前置きだと思ってくれていいからね？

じゃあ、はじまりはじまりー

第二話　異世界へ強制連行

シューシューシュー

ローラースケートで道路を滑る音が夜に響く。

空を見上げればきれいなきれいな十五夜の満月がある。

「誕生日～誕生日～きょーは私の誕生日～＾＾」

私は上機嫌で夜道をローラーですべった。

シューッシュタッー・・・シューシュー・・キィイ

「・・あれ？」

不意に私は立ち止まった。

前方には縦の奇妙な複雑な魔法陣が出現したのだ。

・・なんだろぉー？

シュー

興味本位で私は近づいた。

すると、

ウ”ォン””

と、その魔方陣から　手　が出てきた！！

「ほぇ？」

がしっ！！

いきなり私の腕はその手につかまった。

私がそのことに驚いたが行動を起こす前に

グイッッ

と、引っ張られ、バランスを崩し、そのまま魔方陣に突撃！！

ではなく、そのまま、中に落ちていった。

「ほぉえぇぇぇぇ～～～！！？」

いきなりのことに頭は混乱。

私はただ歪む視界のなかで叫ぶことしかできなかった。

ほぉえぇぇぇー～～つれてかれるー！！！

・・・う”ぇ、キモチワルイ・・・

視界が歪むと同時に体は不安定で頭痛がしてきた。

歪んだ視界で見えるのは・・ひと・・だった・・・

「だ・・れ・・？」

声を振り絞って出す。

ウ”ォンウ”ォン

視界は回るようでいてなんだろう・・宇宙にいるような浮遊感。

まわりは絵の具をぐちゃぐちゃに混ぜたようなそれでいて鮮やかな色をしている。

「ふふ。手荒なまねをして申し訳ありません、私はクロー・リード。

・・私はあなたが　後継者　になってほしいものですね。

あなたにはいろいろ期待していますよ、

辛いことは苦しいことがあってもあなたは　絶対大丈夫　ですよ」

私の腕をつかんだ人がそういった。

そういって、パッと私の腕を放した。

「・・ほぇ？」

私がそう呟くと同時に

ヒュー

と、落下していった。

「ほぉぇぇぇぇ～～～！！？」

本日二回目の叫び声。

私は叫びながら落ちていった。

ヒュー・・ウ”ゥォン”” グウォン””

ただ落ちていくだけだったが不意に空間が歪んだ。

そして、私の足元に大きな光があった。

その中へ私は落ちていき、光が見えなくなった途端、

ゴッツーン！！・・・・・・

頭のぶつかる音が響き、

どさっ

と、私は落っこちた。

「いたたたた・・・」

「っー〜〜〜！！？」

前者は私にぶつかった人、後者は私。

頭がぶつかると同時に視界はぼやけ、頭痛がし、外側から圧迫されるような感覚に陥った。

頭を抑えてその場にうずくまる私。

「！！？君、大丈夫！！？」

私にぶつかった人は私に声をかける。

・・優しそうな人・・・

不意にそう思った。

私は目の前で心配してくれる男の人をぼんやりと見た。

「だいじょうぶ・・です・・・っ！！？」

私はそういって頭を押さえた手を放した・・が、すぐに強烈な痛みと圧迫感が押し寄せた。

「！？君！！大丈夫！！？しっかりして！！」

男の人は私に触れる。

だが、それを最後に私は気を失った。

「ん・・・」

私は目を覚まし、重い瞼を開けた。

「・・・きづいたか」

私に誰かがぼそっと呟いた。

・・さっきの人・・？いや、でも声が低いし、ちょっと雰囲気も違う・・

そう考えながら身を起こす。

起こした途端、頭痛がした。

「・・っーー！！」

私は頭を抑える。

頭痛と同時にめまいもした。

「ーー無理はするな。ーッッ・・この世界にまだ慣れてはいない。」

誰かが言った。

・・だれだろぉ・・・？

私はそう思った。

めまいも治まり私はゆっくりと辺りを見回した。

そこは、畳の部屋だった。

私は布団の上にいて毛布までかぶっていた。

そして私に声をかけた人は壁際によさりかかってる。

・・ぇ・・人じゃない・・・？

私はその人を見て目を見開き、見つめた。

私の視線に気づいてかその人は何か言おうとしたが何も言わなかった。

その次の瞬間、

ガラー

と、ふすまの開く音がした。

「おー、おきとったんかー。心配したでぇー。

気配がすごく伝わってきたもんだからすぐわかってしもうたがなぁ〜」

その声の主が私に近づく。

「・・しゃべる・・ぬいぐるみ・・？」

私は声の主を見て一言呟いた。

そう、言葉どおりそこにいたのは、小さな黄色い二本足で立つしゃべるぬいぐるみだった。

「ぬいぐるみやとぉー！？
わいはなぁ～ケロベロスっていうんやでぇ～？
それも、本の守り神っちゅう大事な大事なやくめをおおせつかってるんやでぇー？
わいをぬいぐるみっちゅうなんてぇーわいはかなしゅうてかなしゅうて・・・」

ぬいぐるみは私に詰め寄りあれやこれは言い募り、最後はうっうっと泣きまねをする。

ケロベロス？・・本の守り神？・・どこかで聞いたことが・・・

私は思い出そうとする。

「あ、私の家に伝わる、伝承だっ！」

ポン

っと手をたたいて声に出して思い出した。

「伝承？なんやぁ～？それ」

ぬいぐるみ・・もといケロベロスが言う。

「え、えと、昔に偉大な魔法使いがたくさんの魔法でいろいろなものを創り出して
カードに封印して、自由に使い分けて生活したって。
でも、その人も亡くなって、封印の力がなくなってカードを本に入れて
本自体を封印して、太陽の司る守護者と月を司る守護者がその本を守るため
本の封印と共に封じられた・・っていう伝承だけど・・・？
あ、その守護者って！？」

私は伝承を説明しひとりでに思い出したように大声を出す。

「そうや。わいらはその守護者やで。
いろいろあって本の封印が解かれてしもうたんやけど。」

ケロベロスは頷きながら言った。

「・・わいら？」

私は聞き返す。

もしかして・・そこの人も！！？

と、思いながらも聞く。

そうや。といわんばかりにケロベロスは頷き、

「そうやでぇ～。
そこにおる、ユエ　も守護者なんやでぇー。」
と、言う。
「・・・・」
ユエ　といわれた人は何も言わず私たちに視線を向けたまま。
「ぇ・・。」
私は思ったことが的中だったため言葉を失った。
「そういえばー、おまえさん、なんちゅう名前やぁ～？」
ケロベロスは私に聞く。
「わ、私、かぐや優姫っていうの。みんなにはかぐやってよばれるけど。」
私は言った。
ほんとはかぐや姫ってよばれるけど、あれははずかしいし。
優姫ってよばれることはそんなにないからかぐやになれちゃったしね。
「そうかそうかー。かぐやっていうんかー。いい名やなー」
ケロベロスは私の手にぽんぽんたたいた。

かぐやが名前じゃないんだけど。
私は内心そう思った。
でも、ほめられるのはうれしいからつい、
「あ、ありがとう、ケロちゃん」
と、言ってしまった。
あ、つい、小さいころのときに言ってた略をーーー
私は慌てて口元を押さえる。
「ケロちゃん・・！？
今、なにげに名を略していわんかったか？」
ケロちゃんは眉をひそめていった。
「あ、つい、小さいころの癖で・・・。
ケロベロスって舌足らずだった私には言えなくって
でも私、ケロちゃんって言うほうがよびやすいし、それでつい・・、
」
私は慌ててていいわけを並べ立てる。
「ふぅーん？」
ケロちゃんはこめかみをぴくぴくさせながらにらむように見据える。

だが、すぐにけろっとしたかおになって

「よいわっ。許したるっ。
かぐやにこれからいろいろ説明しなへんとあかんしなぁー」

と、何度も頷きながら言った。

あんがい、その呼び名は気に入ったようである。

「・・これから?」

私はそうききかえした。

「そうやぁ」

ケロちゃんはそうはっきり頷いた。

第二話　異世界へ強制連行（後書き）

えー、ようやく、ケロちゃん、ユエさん、登場です。
キャラが壊れないよう頑張っていきますので
どうか、気づいた点、こうしたほうがいいという点、があれば遠慮せず言って下さい。お待ちしてます。

第三話　二つの世界

ドサッ

ケロちゃんは普通の本サイズの変わった本を私の目の前に置いた。

「これが、カードの入ってた本やでぇ」

そう言って表紙を指差す。

「ほらみてみぃ？
ここにクローカードってかいてあるやろ？」

「うんうん」

私はケロちゃんの言葉に頷く。

たしかに、表紙の一番上にそう書いてある。

「で、これが、ワイの司る太陽の魔法陣や。
そんでもって、――」

ケロちゃんはそういうなり本を裏返して裏の魔法陣を指差す。

「そんでもって、これがユエの司る月の魔法陣や。
本来ならワイらはこの魔法陣に封印されとったんやけど・・・」

「ゃけど？」

私は聞き返す。

「あるときを境に解けてしもうたんや」

ケロちゃんは言った。

「あるときって？」

私は聞く。

何故封印が解かれたのか・・それが一番知りたい謎だった。

「う～んーー、あれは空間がねじれたときやったかな？
なぁ、ユエ」

ケロちゃんの言葉にユエさんは・・

「・・。あぁ、そうだ。フー
あれは確かに空間が歪み封印の魔力が弱まった。」

と、答えた。

「へぇー、そうだったんだ」

私はよく分からなかったけどとりあえず頷いた。

「そや、んで、ーー」

ケロちゃんは本を表にし、開いた。

「んで、これがカードが入ってたところなんや。」

「へぇー、っていうか、一枚しか入ってないけど・・？」

私はそれを手にとって見た。

そのカードにはウィンディと書いてあって
魔法陣に上書きされた風の精霊のようなものが書かれている。

「そや、うっうっぅ、これしかのこらんかんったんやー～～～」

ケロちゃんは言った。

「後のカードはどこに？？」

私は聞いた。

「わからへん。
それが分かったら苦労してないわ・・」

ケロちゃんは嘆いた。

・・サヨウデスカ・・

「でな、かぐやには魔力も多少身についとるみたいやし
カードキャプターやってほしんや」

ケロちゃんはいった。

「えっ！？

わたしがっ??」

私はその言葉に驚く。

・・カードキャプターなんて・・。

「そうや、この世界、元はもっといいとこだったのにくだらんとこに変わってしもうたんやー」

嘆くケロちゃん。

「くだらない世界?」

私は聞いた。

「そうやー、みてみぃ」

ケロちゃんは近くの窓まで私を導きカーテンを開けた。

「!!?」

私はそこで見た光景を凝視し言葉を失った。

・・えっ!!?

「みたやろ?

このいけ好かない建物ばかりが建ってんねん」

ケロちゃんは言った。

「いけすかないって・・どこが？」
私は思わず呟いた。だって、そこには・・私のいた世界とまるっきり同じなんだもの！！
「ハァァ！？
なにゆうとんねんっ！
ワイが封印される前はもっとなー」
ケロちゃんはそう言って語りはじめた。
モット自然が広がってたとか、夜はモット暗かったとか
そういうことばかり言い募っていった。
途中で私がさえぎった。
「もうわかったから。
こんな風に変わったのはきっと、・・空間が歪んだからなんだね。
だって私のいた世界と同じだもん。
もしかしたらここは鏡の世界になったのかもしれないね」
私は自分のいた地域かどうか、なじみある風景を探しながら言った。
「・・鏡の世界だと？」
ユエさんが聞く。
「うん・・たぶん。
空間が歪んだのは私のいた世界とつながったからだと思うの。

それで私のいた世界のほうが時が進みすぎていたから
・・たぶん・・もとは一つの存在。
だからここはもし～の世界、パラネルワールドなんだよ。」

私は説明した。

二つの世界は元は同じ一つの存在でいつしか枝分かれしていって
交わることのないパラネルワールド同士が空間をつなげ歪ませた。

つまりそういうことなのだ。

まぁ、おくそくにすぎないが、このあたりが妥当だろう。

「・・・」

ユエさんは黙ってしまった。

「そうやったんかー・・・。
なら、なおのこと、かぐやにはカードキャプターやってもらわへんとな！」

ケロちゃんは私の肩をビシッてたたいた。

・・えーけっきょくやんないといけないのー！！

「う”ー。
わかった、やってみるよ、だからたくさん教えてよッ？」

私はしぶしぶ了解した。

「おうっ、まかしときっ」

ケロちゃんは自身ありげに言ったのだった。

第三話　二つの世界（後書き）

しばらく書いていなくてすみませんでした

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3199o/

月は運命の歯車

2010年11月23日00時52分発行